

⑤ 阿部十三『断層』抄（歌集『断層』精華堂、昭和二十七年）

兵たりて

望郷のおもひ通ひあふ列のなかに声なくあゆむ靴ひびかせて

学徒兵ゆゑに吾等は疑はれ呼びいだされて問ひさぐらるる

駅頭にきほひ別れしを思ひいでて血走る眼（まなこ）の前に立ちたり

隠れては手帳に君も手記つづる贖罪果たすもののごとくに

この空のつづく彼方に死闘ありと仰ぎみれども青澄めるのみ

炎上遠望

昼の間（ま）はわが故郷の山脈（なみ）の見えしあたりに火のあられ降る

うらからの叫喚呑みてゐむとだに想ふのみなり火の空を見て

此処まではひびき来ねども凄まじき火勢よ母の叫（おら）びもあるべし

あはれいま故郷（くに）の炎はうちうみに更に激しき光をうつす

故郷（くに）燃ゆる火のおとろへしかかつきの空虚（うつろ）ごころに眠気さしくる

敗戦

低く低く米軍機けさは翔び過ぎて何ごともなき敗国の空

度しみて空を仰がむ戦ひに死にゆきし人等の声をきくべく

ひそかには戦さ疑ひそのままを呟くすらもなくて過ぎたり

昨日とは何の変りもなき木々の青さよけふは敗れたるくに

灰土

焼跡に生ふる紫苑のあをあをしわれの書齋でありしところも

このあたりわが書架ありしと指先にまさぐる灰土（かいど）脆くくづるる

ひと片（ひら）の灰にちかづきしろじろと活字のこれば幾行か読む

吾のごと幾人か焦土に来てをりて掘り返すあり立ちつくすあり

河岸（かし）ここは焦げし立木のふく白き粉（こ）にひかりさし秋の風ふく

舍利

わなわなと震へる唇（くち）を無理じひに遺骨受けつつ母が礼（みや）言ふ

次兄（あに）の舍利抱（いだ）くわれより少しづつ遅れて風のなかをくる母

空間に影像ありぬ遂ひゆけど兄のまなざし対ひきたらず

胸に抱（いだ）く舎利の触れあふ軽（かろ）き音ききつつ寒き坂下（くだ）り
ゆく

次の嗚咽湧きくるらしき眩きに母何か言ふ舎利のわが子に

子に強き母と言ふなれわが見るは弱々と亡兄（あに）にものをいふ母

ふつつつと兄おもふとき唐黍の高き穂しろきひかりを立つる

易々と生命奪ひてゆくゆゑに戦さにくまむ悪（にく）しみ抜かむ

わが兄を死なせし処メレヨンの島の位置さへ定かに知らず

餓死したる兄の面わにつながりて兵たりし日の屈辱がいつ

口裏の切れるまで殴打せし兵の激しきまなこいまにわすれず

けものめき肩を慍（いか）らせ迫りこし下士官よいまを何して居るぞ

偽られみたと戦さを言ひをらむ吾を擲（ぶ）ちたること触れずして

兄を恋ひくるへるごとく母泣けば窓にし見ゆる月も赤かり

作者プロフィール 阿部十三（大正十三年〈一九二四〉～平成六年〈一九九四〉）
歌人。長野県諏訪市生まれ。幼少期に桑名に移居して生育。旧制桑名中学校在

学中から作歌を開始。その後、現・三重大学在学中に短歌会を結成。昭和二十年（一九四五）四月中部第三十六部隊（敦賀）に現役兵として入隊し、同年九月には復員。戦後は公立学校の教壇に立つ傍ら主に歌誌『創作』で活躍し、昭和四十一年には牧水賞を受賞。昭和四十七年創刊の歌誌『長流』の重鎮の一人として活躍。生涯に『断層』『夜思』『凌雨』『柊花』『蒼杉』の五歌集のほか歌論集『現代短歌私攷』を出版した。学校退職後は茂福の四高西隣に住み住居を「静虚草庵」と称した。

⑥ 中村徳之助「戦災受難の歌 三十八首」（「歌稿「戦災受難の歌」斎藤茂吉宛て書簡に同封、昭和二十年）

昭和二十年六月十八日午前一時三十分頃、敵機B29号三十機四日市市に
来襲し、高所より焼夷弾・爆弾及び焼夷爆弾を投下し、市内は一瞬にして焦
土と化す。我が家も敵弾の為め全焼し、多年買ひ集めたる歌集及び歌に關す
る参考書、並びに家財・衣類ことごとく灰燼に帰せり。

松葉杖取出す暇もあらなくにただ身一つに吾はのがれし

妻に背負はれ燃ゆる町をばあとにして磧に急ぐころ細しも

今ごろは我が家も燃えて居りにけむとところに思ひ磧に退避す

鉄橋の下に身を伏せ敵弾を避け居る時に爆音きこゆ

年老いし父の身をしも気づかひて心暗くも退避すわれは

中風病みて歩みなづめる父なれば敵弾のため倒れぬまさむ

亡き乳母の導きにかも端なくも乳母の弟は救ひにぞ来し

亡き乳母の弟に自転車に乗せられて妻と公園さして急げり吾は

受難者の群に交りて吾はしもこころ小暗く時を經にけり

ともすれば父の安否を思ひつつわが心はも暗くなりゆく

配られし固パンもらひ罹災者と云ふみじめさをしみじみとおもふ